

平成 21年 6月 25日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19820057

研究課題名（和文）日本語における聞き手の言語・非言語行動のバリエーション研究

研究課題名（英文）Variation of verbal and non-verbal listening behavior in Japanese

研究代表者

宮崎 幸江 (MIYAZAKI SACHIE)

上智短期大学・英語科・准教授

研究者番号：60442125

研究成果の概要：指示を聞く談話と、おしゃべり談話における聞き手行動を、親疎と力関係からなる4つのコンテキストに分け、相づちとうなずきの頻度と割合、相づちの種類から成るバリエーションについて分析した。また、JSL環境で学ぶ学習者と母語話者の聞き手行動を比較し学習者へのインタビュー調査を行った結果、学習者のメタ知識と日本社会との関わりが、聞き手行動習得に影響を与える可能性を示唆する結果が出た。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	0	1,300,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	2,600,000	390,000	2,990,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：3001

キーワード：(1) 言語学 (2) 社会言語学 (3) 第二言語習得 (4) ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語における「聞き手行動」は、主として言語行動の「あいづち」と非言語行動の「うなずき」から成るが、「聞く」という行為は日本語において、重要な社会言語能力のひとつであると考えられている。日本語の聞き手行動は、その頻度や種類の多さだけでなく、話し手の話を支持する態度や、話者と

の調和を重んじる姿勢、協力的な態度、話し手への感情移入なども特徴 (Lebra 1976; Maynard 1989; Watanabe 1993 他) であると言われており、母語話者は共通のルールを共有している。しかし、具体的なバリエーションの説明や非言語行動を含めた研究 (杉戸 1989; ザトラウスキー 2003) は、緒に着いたばかりで今後の研究の発展が期待される。

(2) 筆者は、ミシガン州立大学大学院言語学科において、日本語母語話者（女性）の聞き手行動のバリエーションを言語と非言語両面について研究してきた。研究成果は、科研費補助金を受け(課題番号:185092)、2007年に『Japanese women's listening behavior in face-to-face conversation』として刊行した。

(3) 前述の Miyazaki (2007) では、19 歳から 61 歳までの日本語母語話者女性 30 名が、同じ研究者から指示を受ける談話（フォーマル）と、親しい同世代の友人とおしゃべりをする談話（インフォーマル）の聞き手行動を分析した。その結果、フォーマル会話において非言語のうなずきと言語行動の総数は、母語話者間に統計的に有意な差はないが、非言語行動（うなずき）の頻度と年齢は負の相関が、言語行動の頻度と年齢には正の相関関係があることが明らかになった。

一方、インフォーマルな会話では、うなずきの頻度と年齢に相関関係はなく、どの世代もフォーマルに比べて頻度は低かった。また言語行動の中で、「あいづち詞」よりも、「繰り返し」、「先取り」、「言い換え」、「コメント」等、実質的発話（杉戸 1989）を含むものが多く使用された他、話し手の発話への重なりや、話し手の発話順番への割り込み等「共話」的な特徴も見られた。

(4) Miyazaki (2007) の実験から得られた聞き手行動のバリエーションを、親疎と力関係からなる 4 つのコンテキスト (Tannen 1993) に分けて説明すると (図 1) のようになる。親疎の程度を横軸に力を縦軸とすると、上半分 (A面、B面) は話し手と聞き手の間に力の差が存在する場合 (例: 親子、上司と部下) があてはまる。A面とB面の違いは、コンテキスト上親疎の程度の差で説明できる。また、

縦軸が下にいく程 (D面、C面)、会話参加者の間に力関係の違いは減じ対等な関係に近づくと言える。

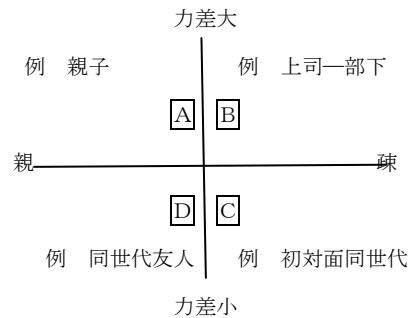


図1 マルチディメンショナルモデル

表 1 は、図 1 の各面の聞き手行動の特徴 (Miyazaki 2007) を示している。

A面 (親しく、力差大)	
聞き手行動	データなし
B面 (疎遠で、力差大: 指示を聞く)	
聞き手: 19歳~23歳の女子大学生 10名 話し手: 41歳初対面研究者(女性)	
	聞き手行動の特徴
言語行動	少なく、フォーマルな型「はい」多用
非言語行動	うなずき(無言)多用
C面 (疎遠だが、力差は聞き手の年齢が高くなるほど相対的に縮小: 指示を聞く)	
聞き手: 45歳~61歳の女性 10名 話し手: 41歳初対面研究者(女性)	
	聞き手行動の特徴
言語行動	多用、フォーマルな型「はい」多用
非言語行動	頻度は年齢と負の相関
D面 (親しく、力差小: おしゃべり)	
聞き手: 同世代友人(女性) 話し手: 同世代友人(女性)	
	聞き手行動の特徴
言語行動	多用、インフォーマルな型「うん」多用、種類が豊富
非言語行動	少ない

表1 コンテキスト別聞き手行動の特徴

(5) Miyazaki (2007) では、フォーマルとインフォーマルのデータで、スピーチアクトが異なるという方法上の問題が指摘された。フォーマル談話は、被験者は研究者からの「指示」を聞くのに対し、インフォーマル談話は同世代の親しい友人から修学旅行の思い出話を聞くおしゃべり談話であるため、聞き手行動のバリエーションの一般化を図るためには、指示会話とおしゃべり会話をそれぞれ分けて比較する必要があった。

(6) 日本語の聞き手行動は、他の言語と比較しても頻度が高いだけでなく、語用論的な要素を含むため、学習者にとって習得が困難なものひとつとされる。学習者の聞き手行動が日本語母語話者とどのように異なるのかを分析することが、日本語教育への応用にとってまずは重要である。そして、学習者の習得状況に影響する社会的要因について説明できれば、日本語教育だけでなく、第二言語習得理論や語用論研究にとっても価値がある。

2. 研究の目的

本研究では、前述の背景から、以下の3つの研究課題：(1) 指示会話における聞き手行動、(2) 母娘会話の「共話」的構造、(3) 日本語学習者の聞き手行動の習得を設定した。これらの研究課題について、適切な実証データの改善をはかり、新しいデータを加えてより包括的に日本語の聞き手行動のバリエーションを解明することを目的とした。

(1) 指示会話における聞き手行動

指示会話に焦点を絞って、図1のA面とD面データの補充を行い、A～Dのコンテキストの聞き手行動バリエーションを比較する。

(2) 母娘の「共話」的構造

おしゃべり会話のA面データ（母娘）を加え、おしゃべり談話における「共話」の構造的特徴を分析する。

(3) 日本語学習者の聞き手行動の習得

JSL 環境で日本語を学ぶ学習者の、指示談話における聞き手行動を、母語話者と比較し、聞き手行動の習得に影響を与える要因について考察する。

3. 研究の方法

各研究課題の実験方法と分析方法は、データの比較を可能にするため、Miyazaki (2007) に従った。従って、聞き手の行動の定義も、「フロアを保持している話し手のターンの間に聞き手が話し手に送った短い発話とうなずき」とし、Clancy et. al (1996) のリアクティブトークン（以下RT）という用語を使って分類し、以下の9種について集計した。RTの下位分類は1. 相づち詞（はい、うん等）、2. リアクティブ表現（ほんとう他）、3. 繰り返し、4. 先取り、5. ターン最初の相づち、6. コメント、7. 笑い、8. 言い換え、9. うなずき（無言）とした。

(1) 指示会話における聞き手行動 データ

A面データとして、10名の19歳から20歳の学生(女性)が、1人の指導教官から同じ指示を受ける際の聞き手行動を分析した。D面指示会話データは、同じゼミに所属する学生の代表2名が、各5人に一対一で同じ指示を与える際の談話を録画分析した。A面とB面のデータをMiyazaki (2007)データのうち、最も若いグループ10名（B面）と最も年長のグループ10名（C面）のデータと比較した。

(2) 母娘会話の「共話」的構造

被験者は、日本語母語話者女性6名（40代

母世代、19～20 歳娘世代、各 3 名) で、家庭で修学旅行の思い出についておしゃべりする談話 (計 45 分) を録画した。母と娘がそれぞれ話し手と聞き手になっている談話の断片 (話段) を、計約 6 分ずつを選び文字化した。

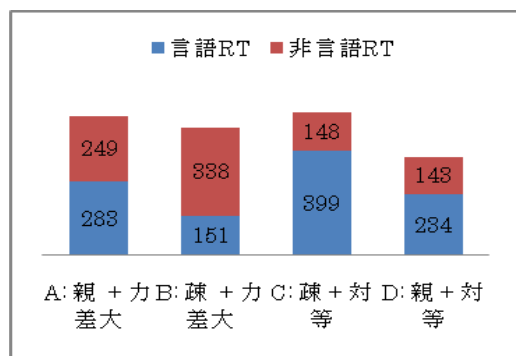
(3) 日本語学習者の聞き手行動の習得

日本の大学で日本語を学習する学習者 20 名 (上級 10 名、中級 10 名) に、研究者が個別に同じ指示を与えた後、被験者の日本語の聞き手行動に対するメタ知識や生活パターン、日本人との交流等について、日本語または英語でインタビューを行った。指示談話とインタビューは、録画し文字化後分析した。

4. 研究成果

(1) 指示会話における聞き手行動

① 言語と非言語 RT のバランス



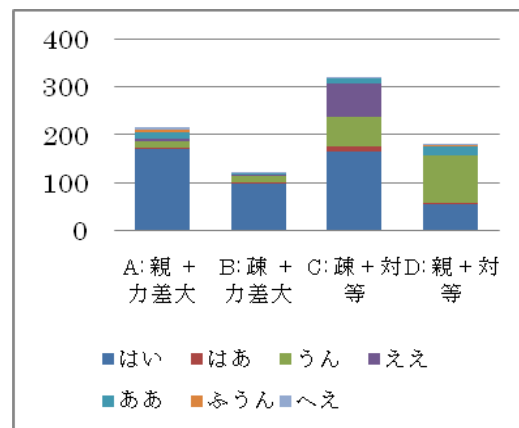
グラフ 1 2 分間に使用された言語・非言語 RT の総数

グラフ 1 は、A～D のコンテキストで使用された言語と非言語の RT の総数を示す。2 分間の指示を聞く間に使用された RT の総数は、D (親しい同世代) が最も少なく C (初対面対等) が最も多い。言語の RT の総数は、B (初対面力差大) が最も少なく、D (親しく対等)、A (親しいが力差有) の順に多くなり、C (初対面力差有) の場合が最も頻度が高い。一方、非言語の RT は、話し手と聞き手の力関係が相対的に小さい C と D に比べ、力関係が大きい

A と B で非言語の比率が高いことがわかる。これは、宮崎 (2009) でも指摘しているように、話し手に対して聞き手の力が相対的に弱い (年下、社会的立場等) 場合、聞き手はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして非言語 RT (うなずき) を多く使用する傾向があるためと解釈する。

② 使用されたあいづちの種類

4 つのコンテキストで使用されたあいづちの種類も、それぞれのコンテキストの特徴を表す。フォーマルな「はい」に対してインフォーマルな「うん」を使用するか否かは、力関係に最も影響を受ける。話し手の方が力を持つと考えられる A と B では、使用された 8 割以上のあいづちが「はい」であるのに対し、力差が小さい C と対等な D では「うん」の比率が高まる。対等で親しい D 面が、最も「うん」の比率が高くなった。「ええ」は、45～61 歳の被験者の間では比較的多く使用されたのに対し、20 歳前後の学生にはほとんど使用されなかったことから、「ええ」の使用は世代間で異なることがわかった。



グラフ 2 あいづち RT の種類とコンテキスト

③ その他の RT

あいづち以外の RT の使用についても、コンテキストによって特徴が見られた。まず、「笑い」は A、B、D 面での使用が目立った。つまり、親疎関係、力関係に関わらず、20 歳前後の聞き手は「笑い」を使う。笑いもポラ

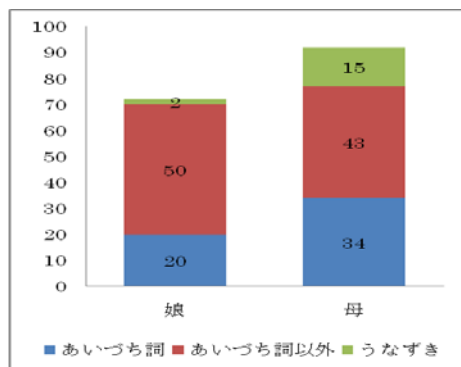
イトネス・ストラテジーのひとつであると言われるように、B面では、場の雰囲気や和らげ、レポートを表す目的で、また親しい関係のA面やD面では、親しさを示す方策として「笑い」を使用するのではないかと推察される。

次に、Cの初対面だが力差は小さい場合の聞き手は、他の場面に比べて、「ターン最初の相づち」を多く使用した。話し手と力差が小さい場合、聞き手は初対面であっても、あいづちをきっかけとして、積極的に発話権を話し手から取り会話に参加する。これは、若者の「笑い」にかかわるポライトネス・ストラテジーなのかもしれない。

親疎の度合いが、あいづち以外のRTの使用で測れるとすれば、コメントや、繰り返し、いい換え、先取りの頻度と割合に表れる可能性がある。A・D面では、話し手との関係は力差有と対等と異なるにも関わらず、あいづち以外の総数とその割合が、非常に似ていた。「共話」にも通じる親しい者同士の会話の特徴と考えれば説明がつく。

(2) 母娘会話の「共話」的構造

① RTの種類と頻度



グラフ3 娘世代と母世代の使用したRT

グラフ3は、母世代と娘世代が約6分話し手の話を聞く際に使用したRTの総数を、うなずき、あいづち詞以外のRTとあいづち詞に分けて集計したものである。娘世代は母世代よりRTの総数が少なく、あいづち詞以外

のRTを多く使用した。

さらに、本実験結果と、親しい同世代女友達の会話(宮崎2007)を比較したところ、母娘会話は、RTの総数は両世代共、友人会話の半数以下で、RTの内訳は、あいづち詞の割合がやや低い。うなずきは、母娘会話(母16%、娘3%)、と、友人会話(親5%、娘12%)で、フォーマルな会話の全世代平均46%(宮崎2007)と比較すると、インフォーマルな会話のうなずきの比率の低さは顕著である。

② 「共話」の特徴

話し手と聞き手が共に、会話を織り上げていく「共話(水谷1984)」構造の特徴として、あいづち詞以外のRT使用、質問や文末表現「ね」「でしょ」が挙げられる。本研究でも、両世代とも、コメントや繰り返し、先取りが上位にあった。また、聞き手が話し手に次々と質問を投げかける談話構造は、同世代おしゃべり(宮崎2007)より、母娘会話の方が頻繁に見られた。聞き手のあいづちを誘導する(Kita & Ide 2007)と言われる終助詞「ね」や文末表現「でしょ」「じゃん」も、本研究でも観察されたが、娘より母の方が、使用頻度が高かった。

③ 母娘会話とイデオロギー

実験結果から、母娘会話では両世代とも同世代友人とのおしゃべりに較べると、聞き手行動の頻度は低いことがわかった。中でも、娘世代が母親の話を聞く際が最も少ない。本研究では、図1のA面とD面のみ分析であったが、「共話」の構造にもコンテキストによるバリエーションが見られた。

特に娘は母に対して、ポライトネスや協調、レポートを示す聞き手行動を重視してないことがわかる。Okamoto & Sato (2007)も、若い女性は同世代の友人と母親と話す時では、母親に対する場合はフィードバックが少ないことを指摘した。Okamoto等のデータは

言語行動のみの分析であったが、本結果は、非言語行動も含めて母娘会話と規範とのずれを実証できたことは意味があるだろう。

(3) 日本語学習者の聞き手行動の習得

第3の研究課題として、日本語学習者の聞き手行動習得についても調査を行った。表2は、2分間指示を聞く際に学習者が使用したRTの頻度を示す。

	あいづち RT	その 他 RT	うなず き	RT 計
上級 (n=10)	180 52%	52 15%	116 33%	348
中級 (n=10)	103 32%	43 13%	177 55%	323
母語話者 (n=10)	122 25%	29 6%	338 69%	489

表2 学習者と母語話者のRT使用

学習者と母語話者を比較すると、学習者はRTの総数が少ない。また、上級学習者は、母語話者、中級学習者よりうなずきは少ないが、あいづちの頻度は母語話者を上回る。語用論的観点から見ると、本実験の上級学習者は、適切な聞き手行動を習得しているとは言えない。なぜなら、中級の学習者の方が、B面の母語話者の聞き手行動の型に近く、上級学習者は「うん」や、あいづち以外のRTなどB面では使用が少ないはずのRTを、比較的高い頻度で使用していたからだ。

インタビューにより、上級学習者で日本社会との接点が多い（ホームステイ・クラブ活動等）学習者程、RTの種類が豊富で頻度も高い傾向があることが明らかになった。つまり、社会的要因が聞き手行動の習得（特にインフォーマルなスタイル）に影響していると言えるのではないだろうか。上級と中級学習者の聞き手行動の違いは、中間言語の習得過

程特有の問題か、今後も研究を継続したい。

最後に、母語話者の聞き手行動のバリエーションが明らかになれば、日本語教育だけでなく、教育やコミュニケーションなど他分野の発展にも貢献できると期待する。本研究は、聞き手行動の対象を女性に限定し、量的分析を中心に行ったが、将来的には質的分析を充実させ、最終的には聞き手行動の性差について研究することを課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

- ① 宮崎幸江、ポライトネス・ストラテジーとしての聞き手のうなずき、上智短期大学紀要29号、55-72、2009、査読有
[学会発表] (計 3件)

- ① 宮崎幸江、The influence of power and distance on variation of listening behavior in Japanese、11th International conference of Pragmatics (IPRA)、2009年7月16日、メルボルン大学：オーストラリア
② 宮崎幸江、母娘の会話における「共話」的構造、社会言語科学会、2008年3月22日、明治大学：東京
③ 宮崎幸江、指示会話における聞き手の行動、日本語実用言語学国際学会(ICPLJ)、2008年3月1日、サンフランシスコ州立大学：アメリカ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮崎 幸江 (MIYAZAKI SACHIE)
上智短期大学・英語科・准教授

研究者番号：60442125

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし